連載ノンフィクション

青雲の果て

―武人黒田清隆の戦い―

第３回

奥田　静夫
フリーライター・開拓史研究家

第２章　薩長連合（続き）

薩長連合に奔走（続き）

薩長連合の密約が成立すると、清隆は木戸一行を護衛して、山口に戻った。

そこで清隆は、藩主毛利敬親に拝謁するということになった。長州藩の品川弥二郎からそのことを告げられた清隆は、

「旅で汚れた羽織では、礼を欠くから」

といって、木戸の羽織と井上馨（聞多）の袴を借用して敬親の御前にまかり出、差料（腰にさす刀剣）を与えられた。

このことを伝え聞くと、長州藩士たちは、袴の紋どころなどに頓着せず、酒も飲める清隆のことを、

「清隆はきわめて豪快な男だ」

とうわさした。また、このとき以来、木戸は、清隆のよい理解者となった。

清隆は、その後も薩長連合の強化を目指して山口と京都、大坂の間をたびたび往復し、６月以降は、「第二次長州征討」にかかわる中国方面の戦況視察も行っている。

黒田清隆（北海道大学附属図書館撮影協力。「明治大正期の北海道」から転載）

大久保利通へ最終的な情況報告をするために、同藩の篠原国幹とともに京都に戻ったのは、慶応２年（1866）８月のことであった。

清隆は、このときの一連の行動を通じて、長州藩の山県有朋（狂介）と知り合い、意気投合した。

連合成立を長州藩主に報告したあと、清隆は山県に送られて大阪に戻ったのだが、そこでの別れに臨んで、山県に次のような詩を贈って、その厚意に感謝している。（伊藤誠哉「北海詩談」）

両心相結んで　　相離れず
事業由来機を見るを　貴しとす
一語君に贈る　　君よく記せよ
回天の志は　　皇基を建つるにあり

これに応じて山県も、次の詩を返している。

男子何すれぞ　　別離を嘆くぞ
計謀一たび定って　　機をあやまつ勿れ
寄に出て変に処すれば　　天日めぐろい
共に錦旗を掲げて　　帝基を護らん

この山県も、長州藩の下級武士の出身で、育った環境などが、清隆と非常によく似ていた。

しかし、二人はのちに憎しみ合う関係になっていくことに、まだ気付いてはいない。

清隆は、このときの薩長連合の成功に、大いに自信を深めた。

（西郷の言葉どおり、今や単なる「砲技の人」ではなく「天下の人」となり得た）

と思った。

彼は政治工作の大切さやそのもたらす妙味を知り、剛毅でやや一本気ながらも、臨機応変で柔軟な思考を培って行く。

そして薩長連合を守ることを終生の使命とし、誇りともしながら、維新激動の荒波に漕ぎ出していった。

薩長連合成立後の展開

薩長連合の密約が成立した日の翌日、つまり慶応２年（1866）１月22日、幕府は長州藩に対する処分を発表した。

防長二州約37万石中、10万石を削り、藩主は隠居、世子は永蟄居とすることなどが、主な内容で

あった。

次いで４月に入ると、長州藩主毛利敬親に召喚状を発し、同時に諸藩に対して再度の長州征討の出兵を求めた。

しかし薩摩藩は、かねてからの長州藩との約束通りこれを返上し、長州藩も幕府に要求を拒否する態度を明らかにした。

このため幕府は、ついに長州征討（「第２次長州征討」）に踏み切った。

征討軍は東西両面から進撃したが、長州藩は藩を挙げて体制を固め、必死に防戦したので、成果はいっこうにあがらなかった。

７月に入り、征討軍西軍は広島に集結、東軍も敗退して大阪に引き揚げた。

そのうちに薩摩藩は、イギリス公使パークスに接近し、列国もこの内戦に中立を確約した。パークスはすでに幕府に見切りをつけていた。

この間、清隆は盛んに動き回って薩長間の連携を密にし、また長崎に飛んで長州藩の伊藤博文（俊介）らの動きを援助した。伊藤は長崎と上海の間を頻繁に行き来して、艦船や武器の調達に当っていたのだ。

20日、将軍徳川家茂（いえもち）が大坂城で病死し、１カ月後、その喪が発表された。朝廷は、しばらく休戦をするよう勅命を下した。

12月５日、徳川慶喜が15代の将軍となった。また25日には、孝明天皇が崩御（ほうぎょ）され、翌慶応３年（1867）１月９日、明治天皇が即位した。

23日、ついに長州征討部隊の解散が発表されたので、まもなく清隆は薩長の交渉役の任務を解かれ、軍賦役見習として鹿児島に帰った。

６月24日、清隆は上役の軍賦役頭取黒田嘉右衛門（清綱）に意見書を提出した。この中で清隆は、幕府攻撃に関連して、大坂城と兵庫港を同時に奇襲するという作戦を提言した。

「兵庫港へ著艦回天丸、黒龍丸弐艘外に賣船三四艘位碇泊の由、是非花城を御抜き被為遊事ならは、至極強悍の人数二小隊位御選抜有之、一小隊つつ蒸気船弐艘へ乗せ、花城と同時に不意に襲撃、回黒の弐艦へ乗入、直ちに御手に入れ度（但し蒸気船弐艘の人数は、大坂へ卸し衝撃の期合に直ちに兵庫へ回し回黒二艦へ乗取度）京師丈けは随分御不足無之候得共、同時に京摂期を合せ御衝撃無之候ては、御成功は万々御六ヶ敷事と愚考いたし候」

（「薩藩海軍史」中巻）

大政奉還（邨田丹陵画・聖徳記念絵画館蔵）

藩内でこのような戦略を考え、説く者は、誰もいなかった。

10月14日、薩摩・長州両藩は、ついに朝廷から「倒幕の密勅」を受けるに至った。これは清隆たちの工作の成果でもあった。

しかし将軍慶喜は、同じ日、自ら大政奉還を奏上し、朝廷はこれを許した。

このため倒幕の密勅は空文に帰したが、ここに260年余にわたる幕府の支配に終止符が打たれた。

このような結果は、幕府に対する諸藩の支持が尽きたためでもあったが、薩摩・長州両藩は、すべてを自分たちの努力の成果と信じた。ことに薩長連合のキーマンとしての役割を担った清隆には、誰よりもこの気持ちが強かった。

第３章　戊辰戦争

鳥羽伏見の激戦

大政奉還のあと、朝廷の実力者岩倉具視（ともみ）（公家）は、西郷隆盛、大久保利通らとはかり、会津藩、桑名藩などの反薩摩勢力を退けて薩長で京都を固め、王政復古の準備をすすめた。

慶応３年（1867）12月９日、王政復古の大号令が発せられた。新政権の実権は事実上三条実美（さねとみ）（公家）、岩倉、西郷、大久保らの手に握られた。

その夜、朝廷では将軍慶喜の処分のことが論議され、土佐藩主山内豊信（とよしげ）（容堂）らは慶喜の政治参加を強く主張したが、岩倉らはこれに反対し、辞官納地などを主張して譲らなかった。

結局岩倉らの主張が通り、翌日、この旨が慶喜に伝えられた。

慶喜は大阪に退いていたが、情況が幕府側に知れわたると、薩長を憎む声が澎湃として起こり、会津藩、桑名藩などは、その兵力を結集した。

薩摩藩は、西郷隆盛の献策により、幕府の後方かく乱を狙い、浪人らをそそのかして江戸市中を脅かすという、思い切った手に出た。

このため幕府から江戸市中の警護を預かっていた庄内藩などは激怒し、約千人の兵を繰り出して薩摩藩邸を急襲、大砲をぶち込んで焼き討ちにした。

薩摩側は数十人の死傷者を出したほか、30人ばかりが現場を脱出して品川沖から船で逃走した。

この報を聞いて勢いづいた会津藩、桑名藩などは、翌慶応４年（1868）１月２日、「討薩の表」を掲げ、１万５千人もの大軍を率いて、鳥羽伏見街道から京都に向けて進撃を始めた。

薩摩藩の伊地知正治、長州藩の山田顕義、土佐藩の板垣退助らは、４千人の兵を動員してこれを迎え撃った。

３日夕刻、鳥羽伏見一帯で、激しい戦いが展開された。（「鳥羽伏見の戦い」。「戊辰戦争」の始まりである。）

清隆は、この戦いに薩摩藩の小銃一番隊の隊長として、部下を率いて奮戦した。

のちに同藩の海江田信義は、

「大接戦になり、清隆とともに敢然と突進した」と述懐している。

また次のように、決死の白兵戦の状況を伝えているものもある。

「伏見鳥羽の役に官幕の兵混戦して、闘い当に酣となった。時に清隆は海江田信義と共に斥候として鳥羽に在った。危機切迫の刹那両人相顧みて矼り込みを謀り、驀進刀を閃かして敵陣に殺到した。敵陣之がため乱るるの端となった」（「近世名将言行録」）

激戦の結果は、近代兵器を備え士気の高い薩摩、長州主体の新政府軍（官軍）が、兵の数ではるかに上回る幕府軍を散々に打ち破って終わった。

将軍慶喜は、多くの部下を置き去りにしたまま、老中酒井忠惇、板倉勝静ら数名とともに大坂城を脱出して船で江戸に逃げ帰り、みじめな姿を世に晒した。

伏見鳥羽戦（松林桂月画・聖徳記念絵画館蔵）

まもなく幕府側諸藩の軍勢も、国もとに引き揚げた。

勝利した新政府軍は、有栖川宮熾仁親王が東征大総督となって江戸に向かった。実質的に指揮をとる参謀は、西郷隆盛であった。

北越征討へ

慶応４年（1868）２月15日、清隆は品川弥二郎（長州）とともに、奥羽鎮撫総督沢為量（公家）の参謀を命じられた。

参謀は、シンボル的な総督のもと実質的に軍を指揮する重要ポストであり、清隆が初めて就いた重職であった。

しかし26日には総督が九条道孝、参謀が大山綱良（格之助、薩摩）、世良修蔵にそれぞれ交代になり、清隆と品川は参謀を辞めた。

大山と世良は、清隆や品川と比べれば、一ランク下の人物であることは、だれの目にも明らかである。

清隆らが辞めた理由は明らかになっていないが、このころ新政府部内では、会津征討をめぐり穏健派（寛大な処分を主張）と強硬派（あくまで武力討伐を主張）の激しい対立が生じていた。

仙台藩執政の三好監物が清隆と品川に対して、「討たれる前に会津が降伏したら、寛典を受ける

べき理があると思うがどうか。もし、討つなら全国の兵を動員し、奥羽全体の生霊を屠り尽す覚悟が必要だが、その場合、天下の平定がいつになるか、予知できない。その覚悟があるのか」

と問いかけたところ、清隆と品川は憮然としていたという。（藤原相之著「仙台戊辰史」）

また、清隆はかねてより、

（真っ先に会津藩を降伏させて事態を収めよう）

と考えていたが、米沢藩の雲井竜雄らの策動家が暗躍し、到底計略のめどが立たなかったため辞任した、ともいう。（米沢藩家老千坂高雅の見方。「史談会速記禄」）

清隆と品川には、新政府内の会津征討方針に強い異論があって、参謀を辞任したものであろう。長州側でも、強硬派の世良が品川に代って就任していることも、そのことを裏付けるものと思われる。

そのあと清隆は、北陸道鎮撫総督の高倉永祐（公家）のもとに移り、長州の山県有朋とともに、あらためてその参謀を命ぜられた。

山県とは旧知の仲である。清隆は配下の諸隊長とともに、陸路、越後高田に向った。

新政府軍の最終ターゲットともいえる会津藩は、越後の岩船、蒲原、三島、魚沼の四郡に５万石もの領地を持っていた。しかも武器弾薬の補給の多くを、新潟港に頼っていた。

この新潟港は幕府の直轄領であったが、長岡藩の実効支配下にあり、正式に開港してはいなかったが、外国商船が自由に出入りしていて、武器弾薬の補給が可能であったのだ。

このため越後は文字通り会津藩の生命線であり、家老の一瀬要人を総督とする会津軍２千人を派遣していた。しかもこの中には、勇猛で聞こえた佐川官兵衛率いる同藩最強部隊、朱雀四番士中隊も含まれていた。

しかし、この広い越後を会津藩単独で守ることは不可能に近い。

勝敗の鍵を握るのは、「中立・非介入」を標榜し、名将といわれる河井継之助（家老･軍事総督）のよる長岡藩の去就であろうと思われた。

長岡藩は７万５千石の石高にもかかわらず、最新式のミニュー銃や大砲を装備するなど、強力な軍事力を誇っていた。しかも前述したように、新潟港を実効支配していた。

このため、会津藩の佐川官兵衛は、新政府軍が越後に進攻すると、河井に圧力をかけ、長岡藩が新政府側に靡かないよう牽制した。

一方、大総督府参謀（参謀総長）の西郷隆盛は、薩摩藩兵ばかりでなく、長州藩の山県有朋に対してさえも、

「越後口に向かったときは、長岡藩とは決して戦うな」

と命じるほど、長岡藩の扱いには注意を払っていた。西郷は、長岡藩の強固な藩風や、河井継之助ほか開明的な人材が多いことを、十分過ぎるほど承知していた。

４月14日、清隆たちの新政府軍は、薩長の兵１千人を主力とし、加賀、安芸、越中らの兵をもって編成し、越後高田に集結して体制を整えた。高田藩は長岡藩に気を使いながらも、すでに新政府側に恭順の方針を決めていたのだ。

ただ、作戦計画の議論は、清隆ら薩摩側の政治工作（裏交渉を含む）論と、山県ら長州側の主戦論が平行線をたどり、まとまらなかった。

結局、清隆と山県は、ここで兵を十日町、小千谷を経て長岡に迫る山道軍と、柏崎を経て長岡に迫る海道軍との二手に分けて、長岡藩の本拠、長岡城を挟撃しょうと企てた。前者は山県と岩村高俊（精一郎、土佐）、後者は清隆と三好軍太郎（長州）が分担する。

清隆と三好の率いる海道軍約２千５百人は日本海沿いに進み、鯨波で桑名兵と交戦したあと柏崎に達し、５月初旬には長岡城西方に到った。

一方、山県らの山道軍約千５百人は、尾張、加賀、信濃諸藩兵とともに魚沼郡千手村まで進み、そこから小出島と三国峠に集結する会津勢を攻撃すべく、二手に分かれた。

小出島を目指す山道軍本隊は、千手村を発ち、小千谷に達した。

profile

奥田 静夫 おくだ しずお

1943年福井県生まれ。金沢大学法文卒。北海道開発局官房長、㈳北海道建設業協会専務理事を経て、フリーライター・開拓史研究家。一道塾会員。札幌市在住。2006年３月、「魂を燃焼し尽くした男―松本十郎の生涯」で第26回北海道ノンフィクション大賞受賞（雑誌「クォリテイ」同年４～12月号連載）。